
夜桜乱舞

桜坂電波塔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜桜乱舞

【Zコード】

N5435R

【作者名】

桜坂電波塔

【あらすじ】

5つの大国が存在する世界。その中心の国、メーズローゼンでのある事件をきっかけに、2勢力による、表の人間の知らない大きな戦いが幕を開けた。

世界のほとんどを敵に回して戦う“夜桜”達は何を思い、何のために戦う？

壹・呪われた運命から外れた少女は事件の一角に巻き込まれ、事件の関係者との出会いから全ての真実を追い求める。

式・利用され続けた少女は運命に囚われ、何も信じず眞実を盲目的に否定し壊して回る。

How About New Heroine?

『HPとべつみました』

零 全てが始まった日に

—

世界歴666年6月9日

この世界に5つある大国のうち、ど真ん中に、その国 メーズローゼン はあつた。

そして、さらにその中心部、この世界を作り出した神がすむという伝説さえもある神殿がある、神域と言つ村。

その日、そこで起つたのはとても大規模な火災。

「やだ…村中みんな燃えてる…。どこに行けば出られるの…」

赤い髪の少女は周りを見渡して、震えた声でつぶやく。

この火災は、ある1件の家が燃えたのち、ものすごい速さで他の家に燃え移つて行き、村全体を全て焼き尽くす大火災となつてゐる。

「お父さんもお母さんも一番火が強い神殿にいるらしいし…私一人じゃどうすればいいかわからないよ…」

目に涙がにじむ。無理もない、彼女はまだ11歳。こんな大規模な火災をして一人きりで、怖くないはずがない。

ついに糸が切れたのかへたり込んでしまつたが、

「おい、何してる。焼け死ぬぞ！」

「え、きやあつ！ちよ…誰！？」

そんな少女の腕を、通りすがつた青年が急に引っ掴んで走り出した。もちろん少女にはこの青年が誰かわからない。

「俺は、お前の両親の知り合いだ。あいつらの頼みで、何があつてもお前にだけは死なれる訳にはいかない」

青年は、少女に向かつてそうとだけ言った。そのあとは、お互い無口に走り続けるだけ。

村中を巻きこんだ大火災。逃げ場なんてもうとっくにないはずなのに、火が2人を避けているかのように道が開けて行く。

少女は、目の前に生きる希望を見出した。

青色の髪をした少女に、逃げるつもりはまったくなかつた。むしろ、このまま自分の人生なんて終わってしまえばいいとさえ思つていた。

彼女は、昔に両親を亡くし、旅をしながら退魔師として生きて来た。この世界には、“異形”と呼ばれる、人でありながら、人でない力を持ったものが存在する。

それらは人間と大差ないため、普通の人間と同じように生活しているものもいるが、凶暴で、暴れることをやめないものもいる。

退魔師と言つのは、そういつた危険な異形を始末する人のことを指す。旅をしながら退魔師の仕事をしていだ彼女は、ある時この神域に辿りつき、そのまま住みついて今に至るというわけだ。

「ああ、そういえば、前に立ち寄つた町でけんか別れしたあいつ…もう一度会いたかったな」

ヒュルルルル

自分は死ぬんだと確定させたうえで思い出を振り返つていた彼女の哀愁漂う彼女の雰囲気をぶち壊しにしたのは、

「あいたつ！」

ポテツと音をさせて彼女の頭上に落つこちた、羽が生えたボール状の物体だった。

「イテ…何が…つて…」これは…」

自分の頭に着地したそいつを田の前に持つて来た時、彼女は絶句した。
が、すぐに平静を取り戻す。

「やつか。やつぱりこの世界は変わり始めてるんだね」

そのボールを見つめながらそんなことを言つっている少女。その様子からすると、いきなり頭上に落ちていた物がなんのかよくわかつていてるようだ。

「…偶然なのか、必然なのか、そんなことは私の知ったことじやない。けど、きっと…」

口を開いた少女の言葉が終わる前に、そいつは…まるで中には光が圧縮されていたかのように、内側から様々な色の光を放ちながらはじけて、光とともに跡形もなく消えた。

きっと、これが私の道なんだ

赤と、青の少女を中心に、この時全てが始まった。

零 全てが始まった日に（後書き）

前に消した、夜桜が咲くころにこの復活バージョンですが、ストーリーはかなり変わると思います。感想、指摘いつでもどうぞ。

壱 旅立ちの時は

—

『私は過去の悲劇を悲しむより、今を笑つて生きたい』

夜神秋葉

この世界は、剣と魔法、更には科学までが交錯する世界。精霊や、獣人、おまけに、異形と呼ばれる異能の力を持つ生き物までいる。

そして、この世界には5つのギルドがあった。北国のクレスト、東国のアキユート、西国のアルトティーバ、南国のパルミュー、そして中央の国のシルターン。

それぞれに特長があり、この世界の者は、14歳になるとその内のはずれかに入ることができる。

それで、この私、夜神秋葉は今日14歳の誕生日を迎えた。

「ティムー、起きて起きてー！」

早朝、カンカン、とばかでかい金属音が鳴り響のは、勿論私の所為だ。

14歳の誕生日、つまりはギルドに入ることが許される年齢になつ

た初日。

今日が私の旅立ちの日だ。ところがわざで、いつもより早く起きてしまつたので、そのまま早くから出発しようと思つて立ち、今に至る。

「ん…。どうした秋葉。今日は無駄に早いじゃないか」

フライパンとお玉を手に持つ、甲高い音を響かせたおかげで起きて来たこの人はティム・マーチって言って、私が3年前、この神域を襲つた火災から逃れてから一緒に住まわせてもらつてゐる兄がわりの人だ。

「今日は、私の誕生日！-よつて早くに旅立つので準備、準備！」

「準備つて…俺が準備することなんてないんじやないか？」

ティムは寝起きがとてもいいから、寝ぼけてるわけではないはずだけど、重要なことをすっかり忘れている。

「ないことないよ。ほら、朝ごはんの準備」

「…お前、旅立つんだから料理くらい練習しておけよ

そう、私はドガづく料理オーナー。どんな簡単な料理であろうと、い

ざ挑戦してみると出来上がるのはいつも気持ち悪い物質。

ティムと会う前で、両親が不在の時も多くあった。でもその時は親友の、旅人ながら神域に住みついた退魔師、レイユ・アンジュに作つてもらつていた。

ちなみに彼女は3年前の火災で亡くなっている。

亡くなつていると言つても、あまりに大きな火災で、死体の判別が出来ていなかはつきりとは言えないが。

「まあ、それより、他の準備は終わつてるから、後朝はん食べて出発するだけだよ

「仕方ないな……」

二

「んー、やつぱりティムの作ったご飯は最高だよー。明日からこのご飯食べられないのは、少し寂しいかなー」

ギルドに入つたら食堂とかあるのかな。もしかしたらビュッフェとかそんな他愛もないことを考える。

やつぱり、なんだかんだ言つても生まれてからずっと住んでたこの地を離れて異国に行くのはちょっと心配なんだよね。

と、そんな時、

「秋葉、お前『クレスト』に入るんだよな。そこにいる俺の友人に連絡とつてあるから心配するなよ」

と、私の心中を知つてか知らずかそんなことを言つてくれた。ティムの友人つて、確かフラウ・グローリアつて名前だつた。

機械についてのエキスパートで、超天才なんだとか。だから、機械系、科学系を専門としたクレストでは、結構いい立ち位置にいるとか。

幸い、私も何度か会つたことがあるし、結構気が合つ人だつたからこれはありがたい。

「うん、ありがと。ティムも、今日ギルドに帰るんだよね」

「ん？ ああ。王雅とエフが待つてるしな」

今のティムが言つた2人は、ティムがギルド『シルターン』で一緒にパーティを組んでる仲間なんだつて。まだ私は会つたことないけど、ティムの仲間なんだからきっといい人たちなんだろうな。

「よし、じゃあ、そろそろ出発かな」

「飯を食べ終わつた私はゆっくり立ち上がると、すぐ前の本棚に置

いてある、昨日手入れしたばかりの銃『ハーキャット』を腰のホルスターにしまって、玄関に向かう。

「ああ、ちょっと待て。これ持つてかないでいいのか？」

靴を履こうとする私を追つて玄関まで来たティムに手渡されたのは、亡くなつた私の親友、レイコの写真が入つた口ケットだつた。

そうだ、昨日、新しい環境に出るのが不安で、旅を続けていたレイコの写真が入つたこれをしてれば少しばん安心できるかもなんて考えてたつけ。

「うん。ありがとうございます。じゃあ、いってきます」

「ああ。それをつけるよ」

ティムと別れて、私は故郷『メーズローゼン』を離れて異国『グレーファス』へと旅立つた。

弐 科学の世界は未知の領域（前書き）

更新が遅くなりましたが一話目です。

近所の街から馬車に乗つて『メーズローゼン』の北、『グレファース』との国境付近にある駅まで行く。

グレファースは科学が発達した国であるため、鉄道と言つ他の国はない移動手段がある。私は鉄道なんて生まれて初めて乗るので実はわくわくが止まらない。どれくらいかと云うと、駅について馬車を降りた時、目の前の段差に気づかずすつ転んだくらい……。ちょっと周りの目が恥ずかしかつたよ。

「あ、駅員さん、『グレファース』のギルド街までの切符よろしくー」「はいよー。お嬢ちゃん、一人かい？」
「そうだよ。もう14歳だからギルドに入るのー」「そうかい、気をつけるんだよ。『グレファース』のギルド街や首都はああみえて治安が悪いんだ。まあ、ギルド街はたまにギルドの人達が巡回してゐるらしいから安全と言えば安全だが……本当に気をつけろんだよ」「はーい。わざわざありがとうねー」

いやー、いい駅員さんだったなー。あつちについてもあれくらい親切な人ばかりだと嬉しいんだけど……。

都會は怖いからね、知らない人についていかないようになないと……。そういえば、なんか結局ティムが心配して、ギルドの近くでティムの友達のフラウが待つてくれることになった。全く、私はもう子供じゃないのに、いつもいつも過保護で困るよー。
おっと、列車が来たよー。なんかすごいねー。電氣つてので動いてるんだつけ？原理はよくわかんないけどすごい乗り物だねー。科学

つてす』』いねー。おお、景色がす』』い勢いで流れて行くよー。

「ねえ、お嬢さん、隣いいかな？」

「ふえ？あ、どうやれ？」

景色に夢中になつてたところに後ろから声をかけられた所為でビックリしてつい変な声がでてしまった。：不意打ちする方が悪いんだよー、私の不注意じやないよー。で、声をかけて来たのは長い銀髪の優しそうなお兄さん。つていうか、なんで席他に空いてるのに隣座るんだろ。

「お嬢さん、君はこれから『グレファス』に行くの？」

「そうだよー。ギルドに入るの。お兄さんはー？」

「んー、僕は首都の方にね。知り合いに直接会つて話したい事とかあるから」

話したい事あるのにわざわざ会つに行くんだー。電話とかじゃダメなのかな。まあ、電話つてのがどういうのかとかは詳しく知らないんだけど。あ、恋人かな？なんか急に会いたくなつたとか。と、それにも今思つたけどお兄さん、銀髪なんて珍しいなー。金髪とかは何回か見たことあるけど銀なんて初めて見たよー。まあ、目は青色なんだけどこいつちは普通な感じだね。

「あ、そうだ。お兄さん、名前教えてくれない？」

「え？名前…？いいけどなんでもまた…」

「いやー、お兄さんみたいな銀髪つて珍しいから、自慢できるかなつて」

「あー、確かに珍しいからね。僕はクロム・スキルショット。君は

？」

「私は夜神秋葉。『メーズローベン』の人だよー。」

やがみ

「夜神……そつか、うん。覚えとくよ。あ、そうだ。君、『メーズローゼン』からってことはもしかして獣人？」

うわ、クロムさん勘いいなー。今更公開な情報だけど私は獣人だよー。あ、獣人って言つても限りなく人に近いからねー。一口に獣人って言つてもほとんど獣に近かったり、ほとんどが人の姿に近かったり、色々あるんだよー。ちなみに私は“鬼”的獣人。鬼つていうと獣つてイメージじゃないけど、他の獣人は親の片方と同じか、片方が大半でもう片方も少し混ざってるって場合（ハーフともいうね）もあるけど、鬼の獣人はメーズローゼンの神域にしか生まれられないの。そのかわり、親は片方が鬼の獣人であればOK。あ、でも鬼なんて珍しいからあんま人にばらしちゃいけないんだよー。

「あ、うん。そうだよー。だから頭隠してるのー」

「あー、そういうことなんだー。そういうえば僕の知り合いに竜の獣人つていたけど、それって珍しい？」

竜？竜の獣人つてたしか昔の火事の時私を助けてくれた人もそうだったような気がする。でも、結構珍しそうだよなー。竜だし。

「んー、たぶん珍しいと思うよ、たぶん」

「そんなんたぶんを強調しないでよ。あ、僕この駅だからもう行くねー」

「あ、うん。ばいばーい」

つと、ていうかさつきから話してたせいで気付かなかつたけど、首都すぎたつてことはもうすぐギルド街だ。いやー、なかなか快適な旅でした。

電車は徐々に速度を落としていき、慣性の法則といつのに従つた私の体は、電車が止まるのと同時に誰もいない座席にボスンと軽い音を立てて倒れた。

「いやー、意外とこれ楽しいわー。『グレーファス』の人って電車乗るたび毎回この感覚楽しんでるのかなー。なんか羨ましいなー」

少し新鮮な気分で、開いた扉から外に出ると、そこはまさに都会と言つた感じで。私には入つて出ただけで世界が変わつてしまつたようと思えた。行きとは違つ、自動の改札に切符を通して、駅の外に出ると、目の前には商店街。これこそがギルド街。戦闘に必要なものから日用品、さらには食事までなんでもそろう商店街。さらにおくを見ると、三・四階建てのビルもいくつか並んでいる。これが首都になるとむつと高いビルがたくさんあるらしい。いやー、想像できないよー。

つと、よし、あんまきょろきょろして田舎出身バレバレな行動したくないし、そろそろギルドに向かおうか。えつと、ギルドにはこの商店街を抜けると着くんだっけ。

とりあえず呆けてばかりもいられないので、とりあえずギルドの方に向に向かって、商店街の方に歩き出した。が、その時、

「おー、そこの女

「はい?」

後ろから声をかけられたため、立ち止まって振り返るとそこには、背が高く、目つきも少々悪い、しかしことなく幼いような顔立ち

…つまりは童顔の青年が私を睨んでいた。

「お前、見かけない顔だな。やっぱお前が奴らの協力者の『異形』なんだろ？」

青年は、冷たい声音で言い放つと、腰に下げた剣を抜いて構えた。
『異形』っていうのは生まれながらになんらかの能力を持つている人の事で（まあ、体质みたいな）西国のメイトルパに多い人種だ。特に親が『異形』の場合に生まれやすいが、普通の人間の間に生まれることもある。『異形』というだけあって、人間離れした能力を持つ人が多いが、同じ能力でも個々の力量によつて能力の大きさも変わる。例えば治癒能力でいうと、どれだけ大きな傷を負つても一瞬で治癒する人もいるし、人より少し回復が早いといつ、本当に体质と言える程度の人もいる。だから簡単に誰が『異形』だとか言いきれないし、差別にもなりうるので最近では能力の大きさによつて呼び方を変えるだとかをしようとする活動もあるらしいけど、その前に、何コレ。命の危機！？

「あ、ちょっととストップ！私は『異形』じゃないよ。それに私、ギルドに入るために異国から来ただけで…」

「煩い。分かりやすい嘘吐くな。この国のギルドに入るのために異国からくる奴なんてそういうの変わり者くらうしかいなー」

自分はその変わり者なわけだが、わざわざ言つてもどうせ信じないだろう。

…それにしてもそんな断言しなくてもねー。
言葉にはださずに心の中でそう思つといった。

「そんなこと言われても、そもそも本当に異形じゃないし…」

「ああ？ 知るかよそんなの。 もし違つてもかまわない。 斬りやあ嘘
かどうかわかる」

「無茶苦茶だ！」

私の抗議の声を全く効かず、青年は私に斬りかかってきた。
といふが、『異形』は体質みたいなものだし、切つても『異形』か
どうかなんてわからないよ！

武 科学の世界は未知の領域（後書き）

自分の趣味で突っ走ってる小説なんでどうかで矛盾が出てくるかも

できるだけ矛盾がでないように頑張って書きます。

一話目で早速命の危機に瀕した秋葉ちゃん、無事にギルドまでたどり着けるんでしょうかね…。

「全く…君には学習能力という物がないのかい？」

生命の危機を感じて目を瞑っていた私が、ふとそんな言葉を聞いて目をあけるとそこにはさっきまで私に襲いかかろうとしていた童顔の青年と対峙している、リュックを背負い作業着のような服を着た青年が目に入った。

「邪魔すんなよ。」いつ、いつ、見かけない服装してゐるし、今度こそ間違ひはずだ

「全く、それで何回間違つたと思つてゐるんだい？」

リュックの彼の言葉で童顔の方は焦つたような顔になり押し黙つた。そこにはさくさくリュックの彼が33回目だよと付け加えた。ところは、私みたいな目にあつた人が少なくとも後32人いるといつひじで、私は最早驚くのを通りこして、ただ呆れた。

「五月蠅いな。ギルド周辺は特に変な奴らが多いせいで、誰だつて怪しく見えるんだよ！」

「君とか特に変だしね」

「それはお前の方だろうがつー。」

いや、知り合い同士ふざけあつのは大いに構わないんだけど、話の流れがいまいちよくわからないただの被害者をあんまりほつとかないでほしい。… ていうかもしかして私忘れられてる？

「あの…私ももう行つていいですか？」

「……あ、」

その反応…やつぱりリュックの人は私を忘れていたらしい。忘れてたって言つたから思い切り蚊帳の外にされてたし。

「ほら、逃げようとしてるだろー…? やつぱりこいつは異形だ！」

はあ、なんだか無性にイライラしてきた。
こんだけ待たされてたら誰でもどつか行きたくなるよ。しかも通行人から奇異の目で見られているとこつこつとがわかつてているからなあさらだ。

一回はつさり異形じゃないって怒鳴つてやるうかと思つた矢先、

「…キール、君はやつぱり馬鹿だね。彼女は異形じゃないよ。僕の知り合いだ」

リュックの青年が童顔の青年・キールに呆れたように言った。
知り合い、そう聞いた私の脳内は、とある一つの事を思い出した。

「あ…もしかしてフラウさん!？」

「久しぶりだね。秋葉。しばらく見ないうちに随分と成長したみた
いだね」

思つた通り、やつぱりティムの友達のフラウだつた。
…ていうかそれならそうと最初から言つてくれればこんなにこじれなことにはならなかつたと思うんだけどな。

「まあ、そういうわけだから、君はまたその辺ぶらついてなよ。じ

やつ

「 フラウさんは、 いまだに私をこらみつけているキールに軽い調子で
言つと、 そのまま私の手を引き、 通りをどんどん進んで行つた。

二

フラウ・グローリアは前にも説明したことがあると思うけど、 機械についてのエキスパートであり、 天才化学者。 おまけに、 『 クレス
ト』 のギルドマスターとも親しくて、 新しくギルドに入る私にとって、 これ以上好都合な知り合いはないだろう。

「 ふう、 ここまできればキールも追つてこないだろ? よ」
「 あ、 フラウさん… 助けてくれてありがとうございました」

延々と走つたため、 私は疲れて息切れをしている。 それに比べて、
ギルドで色々と仕事をしているフラウさんはこの程度では全く疲労
の色など見えない… いや、 よく見ると私以上にバテていた。

「 そんなお礼を言われるようなことはしてないよ。 何より、 僕と秋

葉の仲でしょ？それと、君はいつから僕に敬語で喋るよ？にな
たんだい？いつも通り喋ってくれた方がいいんだけど

「あ、そう？じゃあそつするけど…」

ちなみに言つておぐが、「僕と秋葉の仲」と言つのはこの場合「友
達」といつ言葉に訳される。

フラウは小さいころから天才だったため、まず友達がいない。おま
けに思考パターンが独創的で、はたから見れば変なところもあるの
で余計に友達ができない。ティムや私は数少ない友達の一人だ。
だからこそ彼は友達と、友達との約束は何が何でも守る。変だけど
心強いいい人だ。

「それはそうと、今日はマスターがいるから秋葉ならすぐこでもギ
ルドに入れるとと思うけど、一応頑張つてね」

「そんすぐりでもつて…緊張するよ」

ギルドに入る手続きをするにはまずギルドマスターと直接会わない
といけない。ギルドマスターがギルドに入ることを許可すれば、ど
んな人でもギルドに入ることができる。

「緊張しなくても大丈夫だよ。それより一応ひとつだけ言つておく
よ。マスターに聞かれた事には、全て本当の事を答えて。それが、
一番君のためになるから」

「へ？うん。わかったよ。別に嘘つくな必要なんてないしね」

「うん。それさえわかつてもらえれば他に僕から言つ事はないよ。
ちょうどギルドについたし、頑張つてねー」

「えー？ちょ、まつ、そんないきなりー？」

話に集中してて気付かなかつたけど、フラウの言葉を聞いて周りを
見てみるといつのまにかギルドについていて、フラウがなにか入り

口にいた女人の人と話してると思つたら、今度はその女人の人によつて私は、ギルドの中に連行されていつた。めまぐるしい場面展開で私の頭は正直全くついて行けてない。

ちなみにフラウはと、私の氣も知らずに笑いながらのんきに手を振つてゐる。

そんなフラウを見て、後で頭殴つてやろうかな、なんて思ったのはここだけの秘密にしておこう。

三

「あ、えつと、初めまして…夜神秋葉です…」

「ああ、あなたがフラウの言つていた…初めまして。『クレスト』のギルドマスターマイティ・ハーツです」

結局、緊張する暇さえなくとんとん拍子でギルドマスターとの面会。『クレスト』のギルドマスターははじめてみたけれど、肩までの金髪に、細身ですらつとした体で、結構カッコいい人なんだけど、左目に片眼鏡をつけていて、総合的に言うと穏やかで物静かな雰囲気

の人だ。

でも、そのせいで逆に空気が重く感じる。これが無言の圧力と言つたところだろうか。

私がそんな圧力に必死で耐え抜こうとしていると、唐突にマイティさんが口を開いた。

「… フラウに聞いた時からずっと気になっていたのですが、あなたの出身は… もしかしたらメーズローゼンの神域ですか？」

な、なんてピントな質問…。その通りだし、フラウにも本当の事をつて言われてるから、なんでそんな細かい質問なのかちよつと怖いけど正直に言つべきだよね。

「あ、はい。昨日までセレで暮らしていました」

すると、マイティさんは少し険しこんな表情になつてもう一度質問してきた。

「本当にですか？ あそこはあの火事のままになつていて人が暮らすとこんな感じはずですが」

「あ、そうでしたね。じゃあ、詳しく言つて、住んでいたのは神域じゃなくて、神域近くの高台になりますね」

そつか。一応あそこも神域に入ると思つてたけど、地理的には違うのかもしない。

「高台とこうと… 家はひとつしかありませんが、あの家に住んでいたんですか？」

マイティさん、詳しそうだ。なんでそんな細かな地理情報知つてる

んだる。神域なんて結構な田舎なのに…。

「はい。火事の時に助けてもらつたついでに昨日までずっと住まわせてもらつてました」

「なるほど。それで昔に比べてあまりティム・マーチの姿をみなかつたわけですね」

ティムのことも知つてゐるんだ…。まあ、ティムは強いから他のギルドに知られてても不思議はないけど…。

「まあ、前置きはいの程度で…確認も取れましたし、ここからが本題です」

「ま、前置き…ー?」

今まで前置きつて、長すぎる…ー全部話しつぶれだけかかるのつー!?

「そんな気にしなくてもすぐに終わるので心配しないでください。あなたは、神域で神の儀式をしたことがありますか?」

神の儀式…?ああ、あの巫女服で舞うやつか。

神の儀式つてのは、うん。そういうやつなんだけど、何のためにやるのか詳しくは分からんんだよね。終わつた後に黒い石の入つたペンドントもらつたけど、それも何の意味があるか知らないし。

そんなののこと何で聞くんだろ?!

「昔にありますけど、それがどうかしたんですか?」

「もう少し待つてください。では、こんなものを見たことがありますか?」

私の質問を軽くあしらつと、マイティさんはどこからかニコッと取りだした大きな写真を田の前で持つた。正直、こんなに大きくする意味はないと思つし、マイティさんが見えない。

それに、写真と言つても、実際に撮つたものではないようなので、お得意の科学技術による合成だと思つ。

それで、そこに映つてるものといつのは、具体的に言えばボール。手のひらサイズのボールに、縦と横で十字に交わつている輪がついていて、2枚の羽まで生えている。ボールは紫っぽい色をしているが透明で、奥の景色がうつすら見える程度、そして薄く見える内部の中央が何やらぼんやり光つている。

正直言つてよくわからない物体だ。

「…少なくとも私の14年の人生ではこんな変な物質を見たことはありません」

「本当にですか？もし見たとすれば例の火事の時期だと思いますが」

「火事の時期ねえ…。確かにその時の記憶は他の記憶なんかより鮮明に残つてゐるけど…こんな変な物体見て覚えてない方がおかしいような…」

「そのころなら確實に見てません。ええ、もうバッヂリ断言できま

す」

「そうですか。では…そのベンダントを少し見せてもらひませんか？」

「え、ああはい。どうぞお好きなだけ」

私は服の中に隠れていたベンダントを取り出してマイティさんの目の前に出す。するとマイティさんはそれを手に取り、全体を軽く見るとすぐに返してくれた。

「 もういいですよ。ありがとうございました。あと、勿論あなたは合格なので、さつきの人に部屋を案内させますね。部屋を把握したら、まだ外には出さずに部屋の中で待機していくください。私から、もう少し話したい事がありますので」

「あ、はい……え? ちよ、待つて……」

流れが速すぎる。というか、合格って言う時のノリが明らかに軽かつたから一瞬何を言われてるかわからなかつたよ。

とまあ、色々と思いを巡らせていううちに、さつきの女人にまたもや連行され、私の部屋へと案内された。…案内って言うか、行きと回じように腕を掴まれて連行される形だ。形どころか普通に連行のレベルだ。気遣い丁寧とも全くない。こんなのでよくクビにならないなど、不思議に思つほどだ。

…なんて、自分の置かれている状況を逐一説明してみたこの私、夜神秋葉さんですが、今一番の死活問題は、女人に連行という形で案内されていくことでの、周りからの冷たい奇異の目線が体中に突き刺さつていること…！

誰か、この状況をどうにかしてください…。

参 機械ギルドの天才化学者（後書き）

よつやく3話目です。

次は珍しくシリアス展開になるはずなので早めに投稿したいんです
がはたして奏音にできるのか…。

ちなみにスマ@の方を読んでくださっている方ならおなじみ（？）
の玲羅はいつになつたら出てくる事やら…？

そろそろ別視点から伏線でも張った方がいいのだろうか（え

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5435r/>

夜桜乱舞

2011年10月10日11時35分発行